

國立歴史民俗博物館(仮称) 建設予定地発掘調査報告書

1 9 8 1

財 団 法 人 千葉県文化財センター

凡　　例

1. 本書は、国立歴史民俗博物館（仮称）建設予定地発掘調査報告書である。
2. 調査は、文化庁の委託によって財團法人千葉県文化財センターが実施した。
調査期間は、昭和55年12月1日～昭和56年3月31日までである（整理期間を含む）
3. 本調査および本書の執筆、編集は、当センター調査部班長堀部昭夫が担当した。
4. 調査の遂行、報告書の刊行にあたっては文化庁文化財保護部管理課国立歴史民俗博物館（仮称）設立準備室の御指導を受けた。また、関係各機関の方々には、調査に際し御協力、御支援をいただいた。

記して厚く感謝の意を表します。

目 次

I はじめに.....	1
II 調査の経過.....	1
III 検出した遺構と遺物.....	2
IV 小結.....	4

挿 図

第1図 位置図

第2図 001・002住居跡 005住居跡出土遺物

第3図 住居跡配置図

第4図 瓦

第5図 "

第6図 潜状大溝(1)

第7図 " (2)

第8図 " (3)

第9図 " 配置図

図 版

図版1 調査区全景・001住居跡

図版2 001住居跡遺物出土状況・002住居跡

図版3 Hトレンチ潜状大溝

図版4 I・Pトレンチ "

図版5 O・Nトレンチ "

図版6 出土遺物

I は じ め に

佐倉城は、慶長15年（1610）4月、小見川から移封された土井利勝が、徳川家康の命により約6カ年の歳月をかけ、元和2年（1616）頃完成させたといわれている。

築城から明治4年（1871）の廃城までの約250年間、東の要城としての佐倉城には、代々譜代大名が封じられてきた。

廃城後の明治6年（1873）、陸軍第1軍営御二師管の営所が設営されてから、昭和20年（1945）の終戦による陸軍解体に至るまで、佐倉城跡は陸軍の兵営として使用してきた。

そして、昭和41年以来、明治百年記念事業の一環として、国立歴史民俗博物館（仮称）の建設計画が文化庁で検討されてきたが、昭和45年になって博物館建設予定地として佐倉城跡の国有地が内定、昭和52年度から建設工事に着工し、昭和55年11月に建物が完成し今日に至っている。

このため千葉県は、昭和46年以来文化庁の委託を受けて佐倉城跡の遺構遺存状況の確認と記録保存の発掘調査を下記のとおり実施してきた。

1次	46. 7. 25～46. 8. 13	椎木曲輪 三の丸	400 m ²
2次	51. 6. 1～51. 8. 31	椎木曲輪 馬出し地区	1.300 m ²
3次	52. 1. 28～52. 3. 28	(堅穴住居跡群)	1.200 m ²
4次	52. 10. 20～53. 3. 31	椎木曲輪、屋外展示場B地区	1.200 m ²
5次	54. 12. 1～55. 3. 31	屋外展示場C, D地区	1.650 m ²

また、佐倉市教育委員会も昭和54年12月に佐倉城本丸跡の発掘調査を実施し、これまで絵図でしかわからなかった佐倉城の姿が明らかになりつつある。

そしてこの調査によって中世鹿島城に伴うと思われる遺構が確認され、天文年間（1540年代）に千葉介親胤が一族と鹿嶋幹胤に命じて着工させたと伝えられる鹿島城の研究に新たな問題が提起された。

II 調 査 の 経 過

今回の調査は展示場E地区と計画されている地区13.772 m²のうち800 m²にわたって確認調査を行い、近世佐倉城およびそれ以前の遺跡における地下遺構の有無とその遺存状況を確認して、環境整備あるいは屋外展示場整備等のため同博物館の検討資料を得るために実施したものである。

今回の調査対象地区は、安政6年の実測図によると、追手門から三ノ御門へ通ずる広小路右側の会所及び侍屋敷のあったところに相当し、天神曲輪と呼ばれる地域である。また広小路をはさんだ向側には三の丸御殿があり城内でも重要な位置を占める地域である。

この地域は戦後間もなく住宅地として使用され今日に至っているが、調査は昭和54年度に実施し

た発掘調査と同一軸線による20m方眼を設定し、方眼に沿った巾2m×長さ20mのトレーナーを設けて行った。

III 検出した遺構と遺物

調査区域は、旧佐倉第57連隊の練兵場として使用されていたことや戦後の宅地化などで大巾な地形の変更があり、地下遺構の検出は困難であろうと想定していたが、調査区西側で若干の遺構を確認することができた。

しかしその遺存状況は擾乱が激しく極めて悪く、若干の遺物の出土とわずかに残された遺構の落込みによって確認出来た程度である。

確認された遺構は住居跡8と濠状の大溝1のみである。

住 居 跡

001 住居跡（第2図、図版1・2）

Cトレーナーでその一部が確認されたので拡張し全形の確認に努めたが、大部分削平されわずかに壁の一部と床面が残っているだけであった。床面から掘込まれた小ピットから第2図の遺物が出土したのみである。

(1)は口縁部の一部を欠くはかは完形。口径10.7cm、器高10.8cm、胎土は密で焼成は良く暗黄色を呈する。

器外面はヘラ磨きが施されている。底部は径2.3cmで若干凹みがある。

002 住居跡（第2図、図版2）

Eトレーナーで一部が確認されたので拡張した結果第2図に示したような形状となった。

径約2.6mの円形で、覆土中から約50片の土師器片が出土したがいずれも細片である。

柱穴は検出できず、床面もかなり凹凸があり、明確に住居跡といえるかどうか若干の疑問がある。

003～008住居跡（第3図）はP.Q.Rトレーナーから検出したものであるが、住居跡が重複していることと大部分が擾乱によって破壊されていることから正確にプランを把握できた訳ではない。また005住居跡覆土上面から出土した若干の遺物（第2図）からこれらの住居跡群が五領期の住居跡群である可能性が高い。

005（第2・3図、図版6）

(1) 005 住居跡覆土上面で出土したもので、口径12.8cm器高7.5cm口縁の一部と体部の一部欠損するもので、口縁部は9～10%のハケによるナデ調整、体部はヘラナデによる調整が行われている。胎土も良質で焼成も良い。器内面の底部近くは煮沸による剥離がみとめられる。

(2) 高杯の杯部で $\frac{1}{2}$ が遺存する、口径15.3cm、残存器高6.0cm、胎土は砂粒を若干含むが良質で焼成も良い。内外面とも赤褐色を呈する。内面は1~1.2cm巾のハケによる調整のちへラナデを施している。外面は上半分がハケ調整のちヘラナデ、下半部はヘラナデによって仕上げられている。

瓦(第4・5図)

各トレンチから瓦が出土しているが、集中的に出土したのはOトレンチであるが、大部分が平瓦と丸瓦破片である。

四 中 瓦

濠 状 大 溝 (第 6 ~ 9 図、図版 3 ~ 4)

H レンチの東端でその一部が検出されたので 40m の拡張をして規模と方向の確認を行った結果、上端巾 5.4m、底面巾 2.0 ~ 2.3m の濠状の大溝であることが判明した。

また B レンチでも大溝とそのコーナー部が確認され、さらに I レンチでも屈折点が確認され一定の範囲を区画する状態となった。

そこで大溝の延長を推定し N レンチを設け調査したところ、大溝の一部とコーナー部が確認された。その後大溝の終末部分を確認するため P、Q レンチを設定したが、P レンチで確認出来た大溝は Q レンチで確認されず P、Q レンチの間で方向変換をしているようである。

大溝は第 6 図の土層断面図にみられるように一方が約 45° の角度で掘り込まれているのに対し、反対側は平均 30° と掘り込み角度はゆるやかである。

溝の底面はほぼ水平で掘り込み作業はかなりていねいに行われている。

溝の覆土は最下層を除くすべてが再堆積土であるが、溝の底に旧表土層が堆積していることからある面積を区画する溝として使用されていたと考えられる。

しかしながら、これまで伝えられる佐倉城の絵図のいずれにもこの大溝の記載がみられないことから近世佐倉城築造時にはすでに埋められていた可能性が高い。

近世佐倉城はもともと中世末期に千葉氏が築いた鹿島城の跡地に築城されたと伝えられ、昭和 54 年度の第 5 次調査における椎木門推定地の濠や同年佐倉市教委の本丸跡における調査で確認された濠等は中世鹿島城の遺構と考えられることから、今回の大溝も同様の遺構と想定することが可能であろう。

IV 小 結

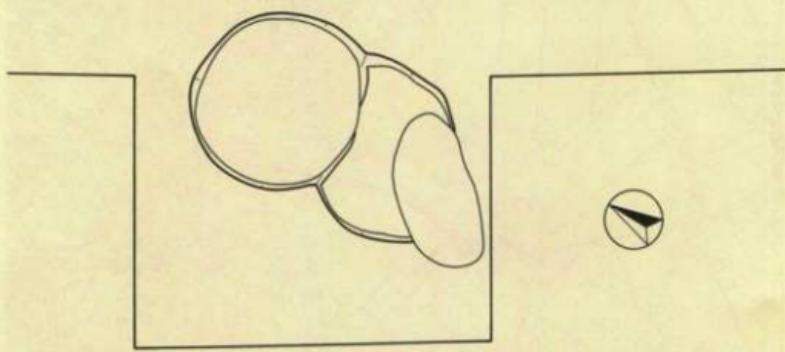
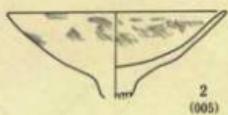
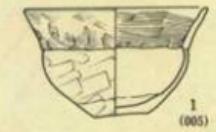
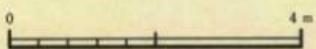
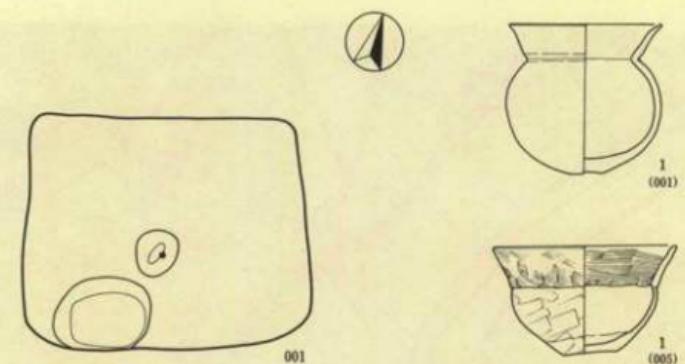
今回の調査は屋外展示場 E 地区における地下遺構の遺存状態を確認すること目的として実施したが、検出できた遺構は住居跡と大溝のみであった。住居跡は大半が搅乱を受けており正確なプランを把握することはできなかった。

調査区東側は搅乱が一段と激しく遺構の確認は不可能であったが、西側には住居跡等が検出され、出土遺物から古墳時代前期の集落が在存することが明らかになった。

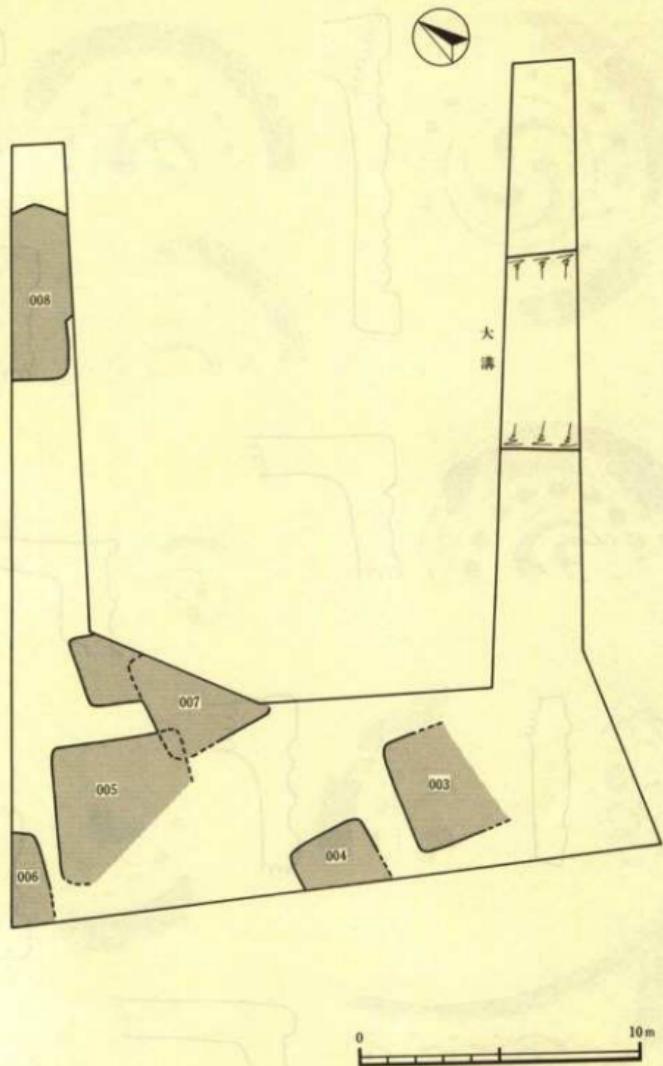
また大溝は第 9 図に示したごとく、あたかも一定地区を区画するかのように掘りめぐらされているが、伝世する佐倉城の絵図にもその記載が認められていないことから中世鹿島城に関連した溝と考えることが妥当であろう。いずれにしても中世鹿島城研究の新しい資料としての意味は大きい。



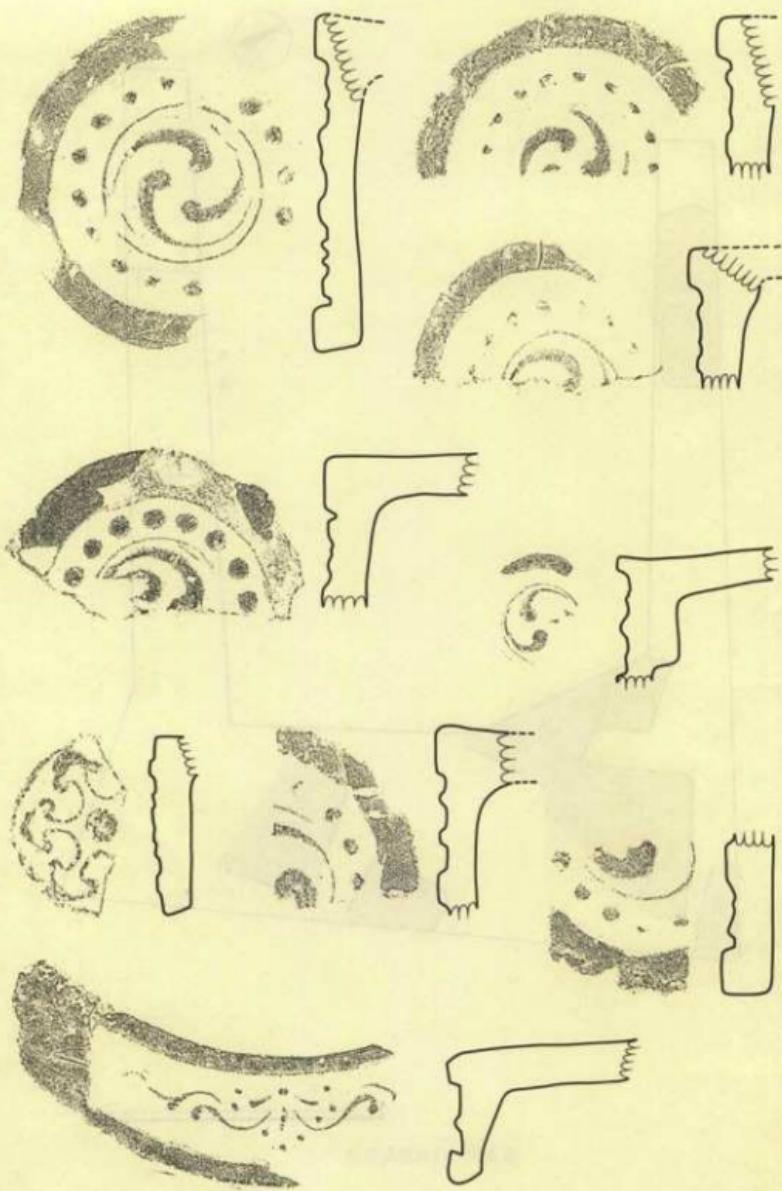
第1図 位置図



第2図 001-002住居図

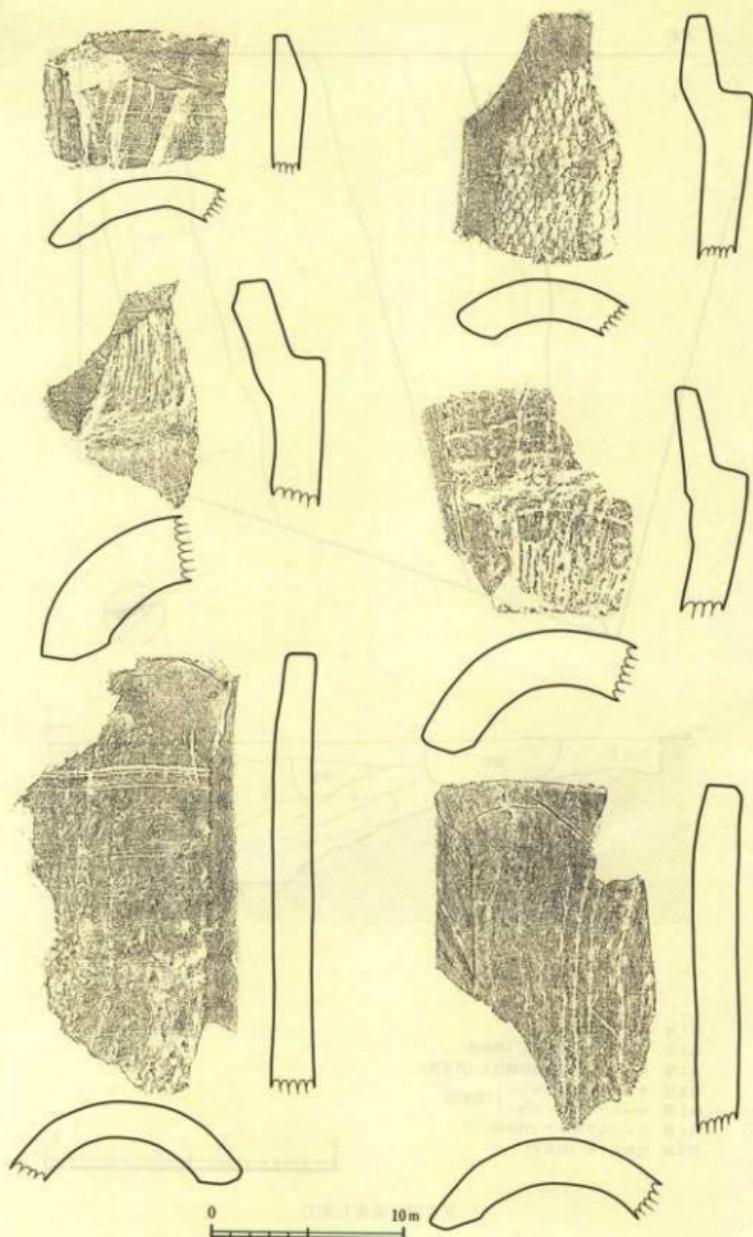


第3図 住居路配置図

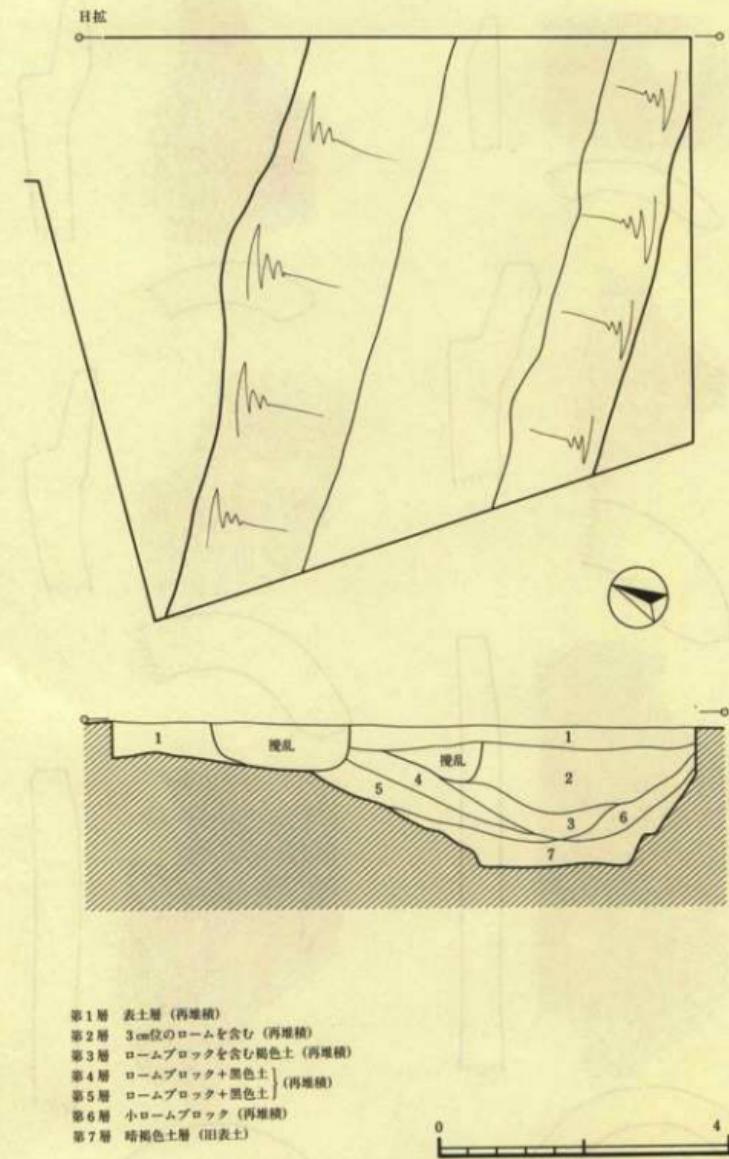


0 10m

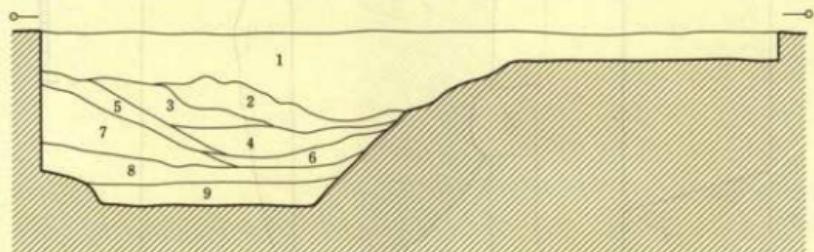
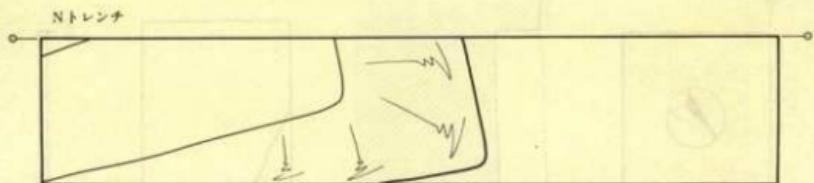
第4図 瓦



第5図 瓦

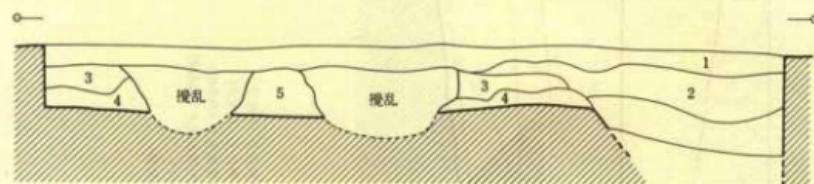
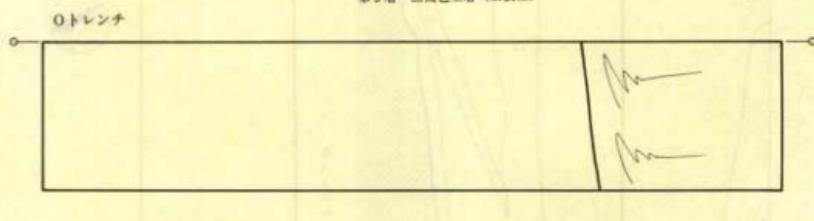


第6図 滝状大溝(1)

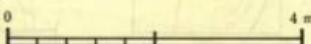


第1層 混乱層
第2層 ロームの再堆積層
第3層 ローム+黒色土(再堆積)
第4層 ロームブロック+黒色土(再堆積)

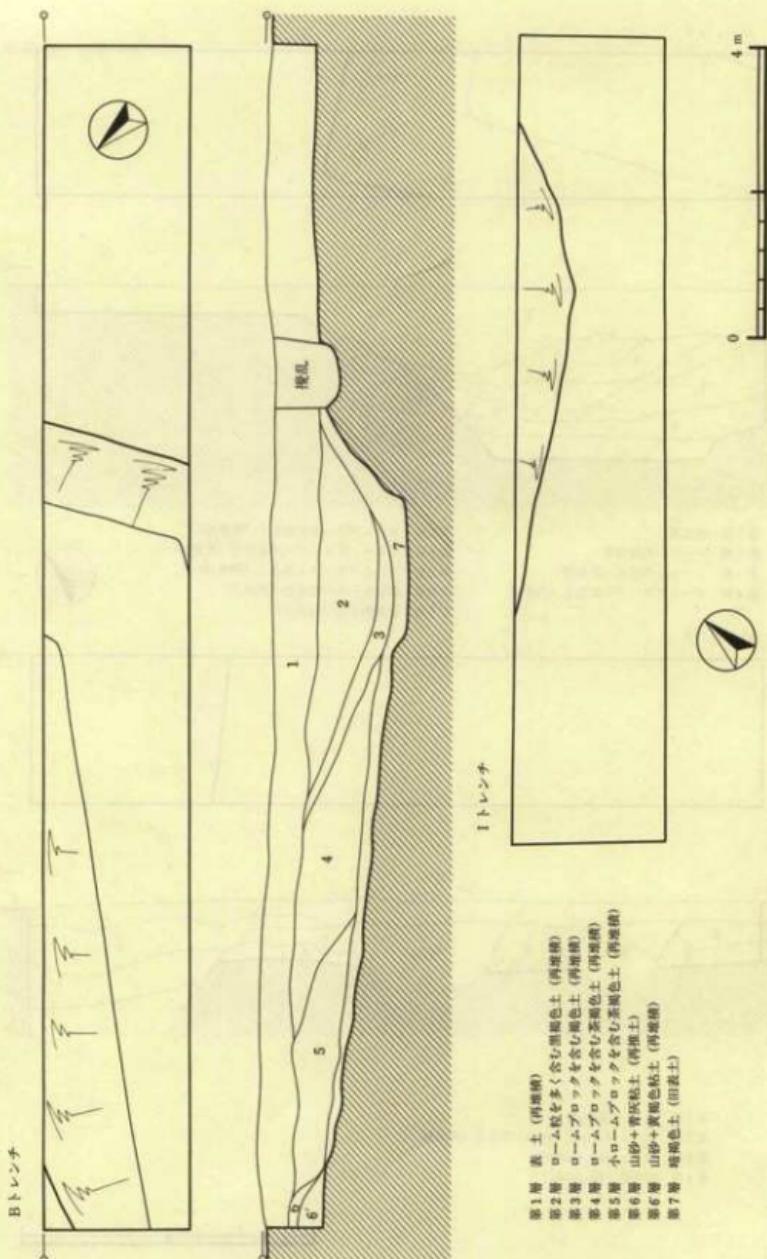
第5層 ロームブロック+黒色土(再堆積)
第6層 小ロームブロック+黒褐色土(再堆積)
第7層 ロームブロック+黒色土(再堆積)
第8層 細粒ローム+暗褐色(再堆積)
第9層 黒褐色土層(旧表土)



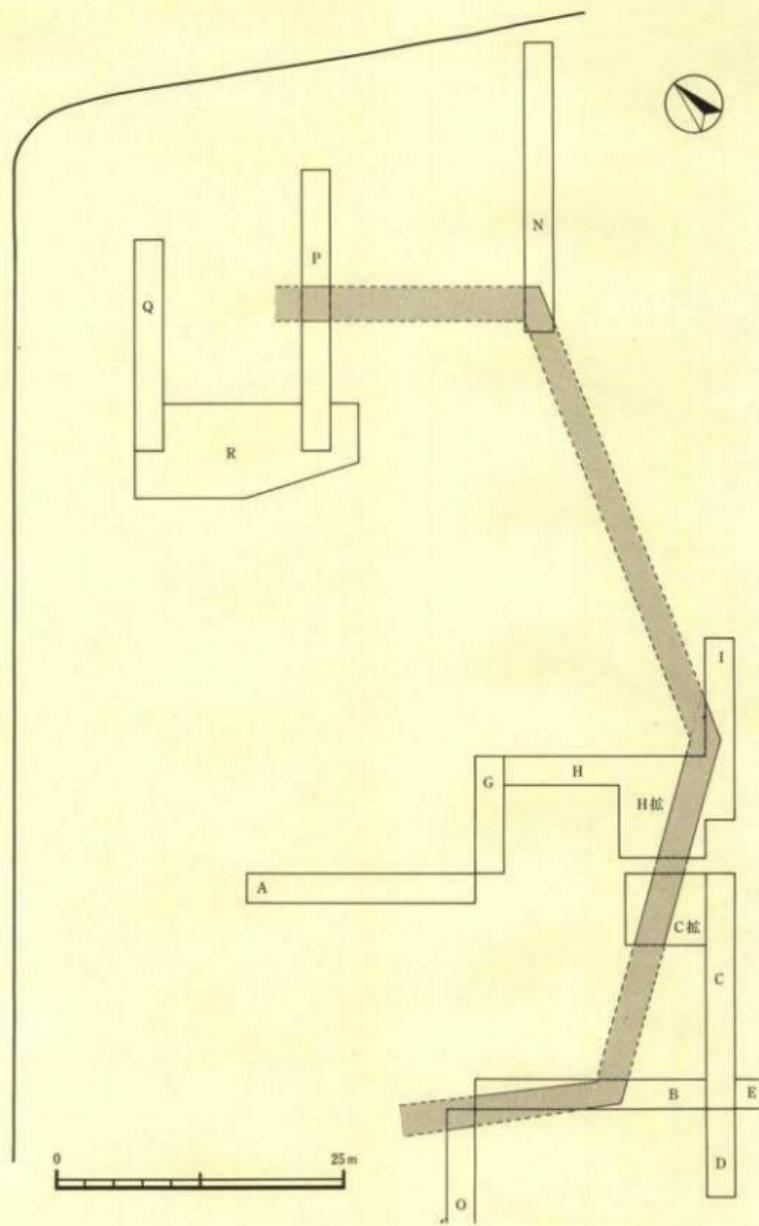
第1層 表土(再堆積)
第2層 ロームブロック+山砂+黒色土(再堆積)
第3層 粘土・山砂(再堆積)
第4層 喀斯特土層(旧表土)



第7図 濁状大溝(2)



第8図 滝状大溝(3)



第9図 大溝配置図

図 版













001

005